

公益信託大成建設自然・歴史環境基金

2022 年度 助成活動・研究報告書

「伊豆石の文化圏」調査研究

—伊豆半島・下田大沢地区の採石場遺跡群の
文化財的価値評価及び採石場の 3D モデル化—

2024 年 1 月 28 日

一般社団法人 伊豆石文化探究会

公益信託大成建設自然・歴史環境基金

2022 年度 助成活動・研究報告書

「伊豆石の文化圏」調査研究

—伊豆半島・下田大沢地区の採石場遺跡群の
文化財的価値評価及び採石場の 3D モデル化—

2024 年 1 月 28 日

一般社団法人 伊豆石文化探究会

「伊豆石の文化圏」調査研究

－伊豆半島・下田大沢地区の採石場遺跡群の文化財的価値評価及び採石場の3Dモデル化－
～2022/10-2024/01 調査報告～

〔調査の目的〕

第一に、下田大沢地区の採石場遺跡の文化財的価値評価を目的とする。伊豆石文化研究会の過去の研究で、伊豆半島中の採石場から切り出された石材は、産額にして明治期の首都圏周辺の石材産業全体の7から8割を占め、東京や横浜の近代化を担った重要産業であったことが判明した。本調査対象の採石場は『官報第1816号』（明治22年）の「東京府ニ於テ調査セル昨二十一年府下建築用ニ使用セシ石材」に記載のある年間12,000切の石材を東京府に供給した「下田大沢」の採石場遺跡群の一つであると推測できる。しかし、石材の種類、採石場の形状・規模、周囲の状況の現地調査が未実施で、史料との突き合わせによる確証が得られない。不便な立地や崩落等により、実際に訪問できる採石場遺跡は少ないが、この度無償公開をご希望する所有者と接触が取れたこの採石場遺跡は、アクセスも良く当時の状態を保っており、現地調査を行い詳細に分析することで、不透明であった明治期の採石に関する文化財的価値を明確化できる。

第二に、採石場遺跡の全体像をWeb公開することによって、産業史としての認知度向上を目的とする。これまでも「伊豆石」の採石場遺跡は、その文化財的価値が指摘されてきた反面、安全性の観点から一般公開を行うことが難しい状況があった。そこで本調査では、SfM(Structure from Motion)技術を使用し、採石場遺跡を3Dモデル化する。Web公開により誰でも採石場遺跡の全体像を把握することができるため、認知度向上には効果的であると考えた。

〔内容と方法〕

2022年11月から行われた今回の調査・広報活動は、伊豆石文化研究会（2023年8月に「一般社団法人伊豆石文化研究会」として登記）を調査主体とし下記の四点を計画して進められた。

- ①「下田大沢地区」の採石場遺跡のドローンによる撮影
- ②撮影データの3Dモデル化
- ③伊豆半島の採石場に関わる史料整理
- ④伊豆石産業遺産群の存在周知・広報

①「下田市大沢地区」の採石場遺跡のドローンによる撮影・②撮影データの3Dモデル化の作業は、請負業者の選定の結果、「株式会社補修技術設計」さまに依頼することとなった。

③伊豆半島の採石場に関わる史料整理では、関連する史料の文字起こしと、石材の物流を司る船舶の状況について整理することができた。これにより、「下田大沢地区」の採石場遺

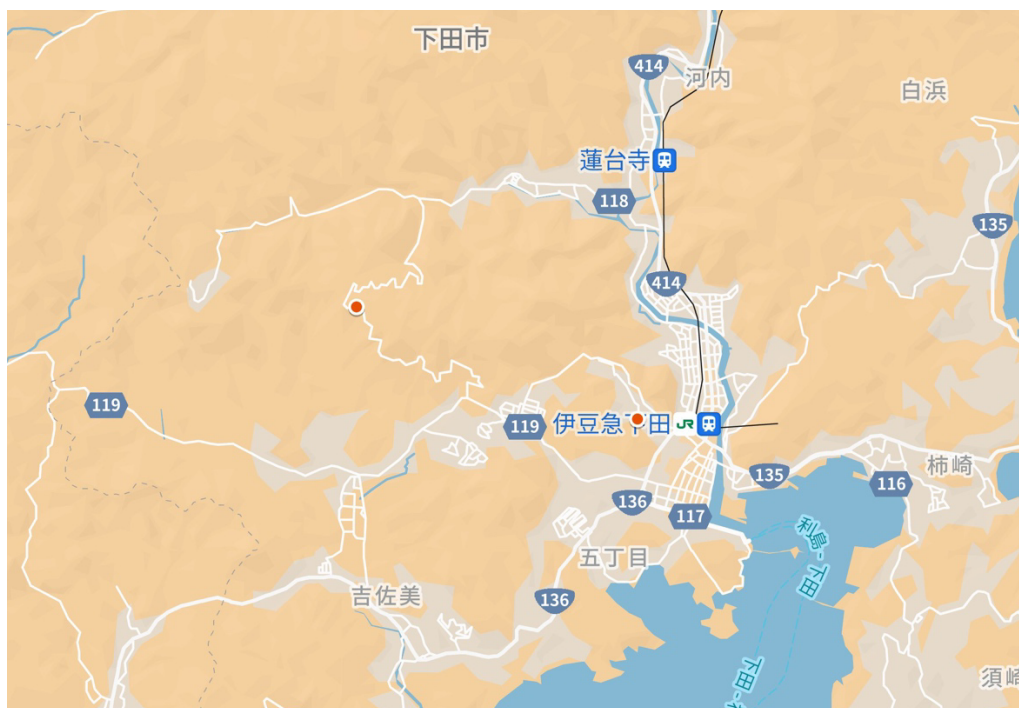
跡から切り出された石材の該当する産地と運搬についての詳細が明らかになった。

「④伊豆石蔵の存在周知・広報」では、上記の作業を基にして、下田市内の「伊豆石産業遺産群」を定義し、下田市内にて当会で作成した展示物の掲示や、チラシの配布にて周知を行った。

〔①「下田大沢地区」の採石場遺跡のドローンによる撮影〕

所在地：静岡県下田市大沢（34.688178, 138.912503）

※左の赤印がデータを取得した大沢石切場、右の赤印が訪問した敷根石切場。



今回データ取得のために撮影を行った該当採石場遺跡は、伊豆急下田駅から自動車で10分ほどの位置に存在する。ヒノキ材林道の峠道の頂上に近い位置である。該当の採石場遺跡から、南東方向に林道を下ると別の石切場の存在も確認された。2023年時点での所有者であるMさまの快諾により今回の撮影が可能となった。

撮影は、株式会社補修技術設計さまに依頼を行い、現地確認と撮影の大きく2回の訪問に分けて実施された。現地確認の際に、カメラ撮影でのデータ取得と、ドローン撮影でのデータ取得の2方式を検討した結果、10mもの高さのある本採石場遺跡ではドローン撮影でのデータ取得が望ましいという結論に至った。暗所での撮影が懸念されたが、所有者のMさまの協力もあり、採石場遺跡内に電灯を設けていただき、撮影が可能となった。

その他、撮影を行わない訪問として、敷根丁場と南伊豆町のカノー伝説石切場を見学し、写真撮影による記録を実施した。

現地確認日：2022年10月8日（土）

→下田市大沢石切場の現地視察、南伊豆町カノー伝説石切場の現地視察

敷根丁場見学：2023年2月19日（日）

→下田市敷根石切場の現地視察、敷根石切場所有者「雑忠」訪問

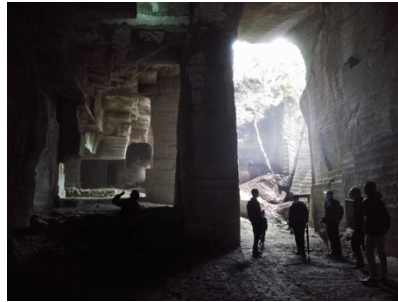
撮影日：2023年3月22日（水）～3月25日（土）

→下田市大沢石切場のデータ取得用の現地撮影

静岡県下田市大沢：大沢石切場（34.688178, 138.912503）



静岡県下田市敷根：敷根石切場（34.6795280, 138.9388575）及び「雑忠」



〔②撮影データの3Dモデル化〕

【株式会社補修技術設計】について】

会社概要（2024年1月時点）

商号 株式会社補修技術設計 <https://www.ire-c.com/>

事業所 〒134-0088 東京都江戸川区西葛西 6-24-8 尚伸ビル 5F

TEL：03-3877-4642 FAX：03-3688-6342

役員 代表取締役 中馬 勝己

設立 平成17年5月17日

資本金 900万円

主要業務

- (1)調査業務
- (2)近接点検支援業務
- (3)工事支援業務
- (4)補修・補強設計業務
- (5)3次元関連技術に関わる業務
- (6)開発・販売業務

- ・公共構造物からマンション、工場に至るまで、様々な手法による劣化調査、腐食量調査
- ・橋梁などの構造物の簡易点検治具による桁下調査や UAV による調査など、様々な技術で点検
- ・墨出し、原寸取りから製作図、技術提案までニーズに合わせた支援
- ・各種構造物の施工計画から補修、補強設計、積算
- ・最新技術を用いた3次元関連技術を駆使し、現場の要求事項に合った調査
- ・計測方法を提案



「<https://www.izustone.or.jp/>」

一般社団法人伊豆石文化研究会サイトにて3D撮影を用いた解説動画公開
※サイトは予告なく変更、削除される可能性があります。



およそ10mの高さのある採石場遺跡の内部の撮影には UAV を用いることが望ましいと考えられた。株式会社補修技術設計は、UAV で撮影した動画や静止画をもとに3D データを作成する技術を有していたために、今回撮影と3D化の作業をご依頼する運びとなった。



〔③伊豆半島の採石場に関わる史料整理〕

第一に、清水省吾、「静岡県産建築石材試験報文」、『地質調査報告』、第 51 号、pp, 1-127、著作権所有農商務省、東陽堂、1914 の文字起こし作業に当たった。大正 3 年に報告されたこの史料は、現在まで伊豆半島の石材産業史に関わる研究の中で中心的な検討が行われてこなかった。しかし、採石場遺跡群の全体を示した極めて重要な史料であると考えられる。下記に文字起こしした内容の中でも、下田市内の採石場に関わる部分を抜き出した。

白濱村

字長田、原田、板戸等ニ採石場十數個所アリ、然レトモ何レモ規模甚タ小ニシテ農閑稼行スルニ過キス、其内最モ大ナルハ字長田ノ大坪丁場ナリトス

大坪丁場 大坪丁場 ハ宍道勝造、藤井文造外二名稼行ス、明治二十ニ三年頃ノ開場ニ係リ一個年約千五百切ヲ産ス、本石材ハ質良好ナラサルヲ以テ他ニ輸出セス、價格ハ丁場渡シ一切ニ付十錢六厘ナリ

稻生澤村

採石場十數個所アリ、字「タトリド」、八木山、丸山等ニ散在ス、其主ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

「タトリド」 「タトリド」ハ既ニ古幕時代ニ採石セラレタリト云フ、目下稼行セルハ鈴木善次郎ノ大澤丁場ノミナリ、同丁場ハ採石面積約十坪ニシテ地下三十尺ヨリ採石ス、其漸ク人ニ知ラルトニ至リシハ明治十四年頃ニシテ同二十七年頃ヨリ同三十八年頃迄ハ一個年六千切内外ヲ産出セリ目下石工四名従業シ一個年三千切乃至四千切ヲ採取ス、本石材ハ灰綠色ニシテ質稍堅キヲ以テ建築用ノ外佛石等ニ供用セラレ本村附近及東京ニ需要アリ、東京迄ノ運搬ハ稻生澤川迄約一里ヲ人車ニヨリ、約十八町ヲ三十切積ミ川船ニヨリ、次テ七八十噸積ミ帆船ニヨル、其運賃ハ一切ニ付各七錢、ニ錢及六錢合計十五錢、採石費ハ同十錢五厘、價格ハ稻生澤川渡シ同二十五錢ナリ

八木山 八木山 ハ古來盛ニ採石セラレタル所ニシテ八木山丁場アリ、同丁場ハ明治四十二年ヨリ中ノ瀨株式會社稼行シ同四十三年ニ約八千切ヲ産出シ、爾後大正元年迄ハ一個年約五千切ヲ産出セルモ大正二年ヨリ休業ス、石質ハ大澤丁場産ト大差ナク石材運搬ノ方法モ亦相同シ、價格ハ丁場渡シ一切ニ付二十一ニ錢ナリ

丸山 丸山ハ既ニ古幕時代ニ採石セラレタリト云フ、村山波次郎及山田藤十郎ノ稼行スル小澤丁場アリ、同丁場ハ明治十八年頃ハ産額一個年一萬切餘ナリシモ目下ハ約七千切ナリ、採石面積ハ約七百坪アリテ石工十名従業ス、採取セル石材ハ稻生澤川迄約七町半ヲ輕便軌條ニヨリ、四五町ヲ百五六十切積ミ川船ニヨリ本船ニ運搬ス、其運賃ハ一切ニ付各ニ錢五厘及六厘ニシテ價格ハ稻生澤川渡シ一切ニ付十二錢乃至十五錢ナリ、石質ハ大澤丁場産ト大差ナク需要地ハ伊東、東京及横濱ヲ主トス

本郷 本郷ハ古幕時代ヨリ採石セラル、所ナリ、其下田町ニ境スル所ニ中田安五郎及松本兼

藏ノ稼行スル敷根丁場、同丁場ノ北方ニ松本圓之助ノ嘗テ稼行セル大「トデ」丁場アリ敷根丁場ハ明治四十四年頃ハ一個年約八千切ヲ産出セルモ目下石工ニ三名従業シ一個年二千切乃至三千切ヲ採取スルニ過キス、而シテ材料ハ漸ク盡キントシ今後多量ノ採石ハ望ムヘカラサルカ如シ、石材ハ約十間ヲ人背ニヨリ、七八町ヲ人車ニ下田町海岸ニ運搬積ス、其運賃ハ一切ニ付各一錢五厘及一錢五厘ニシテ價格ハ海岸渡シ同十二錢ナリ、石材ハ白石ト稱セラレ需要地ハ本村及東京ヲ主トス、大「トデ」丁場ハ目下材料盡キ殆ト休業セル状態ニアリ南上村

字毛倉野ニ道路修繕用トシテ僅ニ採石セルモノアルノミ

下田町

本町ハ數年前迄ハ稍盛ニ採石セラレタルモ近年良質石材ノ産出セサルト大谷石、房州石ノ盛ニ採切セラルトニヨリ需要著シク減少セリ、目下稼行セル採石場ノ主ナルモノハ左ノ如シ

星谷丁場 星谷丁場 ハ字星谷ニアリテ臼井春次郎稼行ス、本丁場ハ七八十年前ノ開場ニ係リ明治十四五年頃最モ盛ニシテ一個年約十萬切ヲ産出シタリ、目下石工約十名従業シ産額一個年七八萬切ナリ、採取セル石材ハ十間乃至十五間ヲ担出シ人車ニヨリ海岸ニ運搬ス、此間約十町アリ、其運賃ハ一切ニ付各一錢乃至三錢及二錢、價格ハ海岸渡シ同十六七錢ナリ、現時産出スル石材ハ伊豆御影ト稱セラレタル時ノ倂ナク黒灰色及白色交互シ質甚タ脆弱ニシテ風化ニ坑スルカ小ニ俗ニ斑石ト稱スルモノナリ、用途ハ石垣及倉庫用等ニシテ需要地ハ下田附近、横濱、東京等ヲ主トス

マムシ丁場 「マムシ」丁場 ハ稲生澤村ニ接シ同村内敷根丁場ノ南方ニアリテ松本圓之助稼行ス、本丁場ハ古幕時代ノ開場ニ係リ明治二十七年ヨリ同四十年に至ル間ハ一個年約五千切ヲ産出セリ、目下良質ノ石材ヲ得難ク産額ハ一個年二千切内外ナリ、採取セル石材ハ三四間担出シ人車ニヨリ海岸ニ運搬ス、其間約六町アリ、運賃ハ一切ニ付各二錢、一錢五厘ニシテ價格ハ海岸渡シ同十二三錢ナリ、石材ハ白色ヲ呈シ質脆弱ナリ、用途ハ星谷丁場産ト同シク需要地ハ下田附近ナリ

朝日村

字大賀茂ニ採石ス、採石場六七個所アリ、内鼻岩丁場及桂越路丁場其主ナルモノトス

鼻岩丁場 鼻岩丁場ハ字鼻岩ニアリテ五六十年前ノ開場ニ係リ明治三十六年頃ヨリ石垣兼吉之ヲ稼行シ同四十四年頃ニハ石工十五名従業シ一個年約二萬切ヲ産出シタリ、目下ノ産額ハ一個年一萬五千切ナリ、丁場ハ二個所ニ分レーハ採石面積約五十坪、一ハ約五百坪ニシテ地下四十尺ノ所ヨリ採石ス、而シテ石材ハ五間乃至十間担出シ馬車ニヨリ下田海岸ニ搬出ス、此間約三十八町アリ、其運賃ハ一切ニ付各一錢五厘及八錢ニシテ下田、東京間ハ同約十錢ナリ、價格ハ下田海岸渡シ外觀一樣ニシテ質堅硬ナリ、用途ハ建築用ヲ主トシ需要地ハ東京、横濱ヲ主トス

桂越路丁場 桂越路丁場 ハ鼻岩丁場ノ南西約五町ニ位シ田原専太郎及石垣兼吉之ヲ稼行ス、採石面積約五百坪アリテ地下二十五尺ノ所ヨリ採石ス、本石材ハ質鼻岩丁場産ニ比シ少シク黑色ナル外質殆ト同シク産額、價格モ略相同シ

竹麻村

嘗テ字青市ニ採石セルコトアリト云フ、現時ハ字湊小字芝ノ谷ニ採石シ産額一個年約二百切ニシテ用途ハ多ク墓碑用ナリ

南中村 字上加茂ニ採石場數十個所アリ、其主ナルモノヲ挙レハ左ノ如シ

立棒丁場 立棒丁場ハ古幕時代ノ開場ニ係リ渡邊伴之助稼行ス、其最モ盛ナリシハ明治二十九年頃ニシテ一個年ノ産額十萬切餘ニ達セリト云フ、目下石工約五十名地下百尺餘ノ所ニ従業シ一個年五萬切ヲ産ス、採取セル石材ハ坑外ニ担出シ人車ニヨリ約十町ヲ隔ツル手石川ニ、次テ十五切乃至三十切積ミ川舟ニヨリ約一里ヲ隔ツル竹麻村海岸字手石ニ運搬シ、百噸乃至百五十噸積ミ帆船ニヨリ東京ニ船送ス、其運賃ハ一切ニ付各一錢五厘乃至二錢、一錢、二錢、十錢合計約十五錢ニシテ價格ハ手石川渡シ同二十五錢ナリ、本石材ハ青灰色ニシテ質堅硬ナルヲ以テ建築用ノ外佛石トシテ需要アリ、或ハ薄ク板狀ニ截切シ熱灼シ更ニ珞瑯ヲ施シテ熱灼スル時ハ裝飾煉瓦ニ代用シ得ヘシ、三井銀行築造物ニ使用セラレタル裝飾煉瓦ハ即チ是ナリ

南崎村 明治四十三年頃迄ハ字下流ノ北方「サウヂウ」越ニ採石シタリシモ既ニ材料盡キ同下採石場トシテハ一モ見ルヘキモノナシ

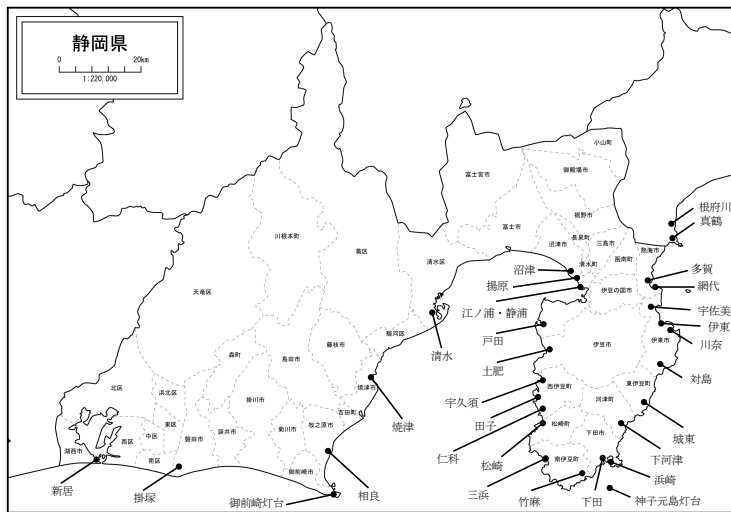
南中村

アタゴ丁場 「アタゴ」丁場 ハ立棒丁場ト同シク古幕時代ノ開場ニ係リ渡邊伴三郎及小針友太郎稼行ス、目下石工約五十名従業シ一個年約五萬切ヲ産ス、本丁場ハ山腹中ニ長サ約百間ノ坑道ヲ設ケ地下三四十尺ノ深サヨリ採石ス、石材ハ立棒丁場産ト品質相同シクシテ色稍濃シ、價格ハ手石川渡シ一切ニ付二十二錢ナリ

マブ丁場 「マブ」丁場 ハ 開場ノ時代、産額等凡テ「アタゴ」丁場ニ同シ、本丁場ハ渡邊喜平、鈴木豊太郎及笠井藤太郎稼行シ山腹ニ長サ約百五十間ノ坑道ヲ設ケ地下三四十尺ノ所ヨリ採石ス、石質、運賃、價格皆「アタゴ」丁場ニ於ケルト同様ナリ

ゴワン丁場 「ゴワン」丁場 ハ「アタゴ」丁場ト同時代ニ開場セラレタリト云フ、渡邊要稼行シ一個年七八千切ヲ産ス、此丁場モ山腹中ニ長サ約六十間ノ坑道ヲ設ケ地下五六十尺ノ深サヨリ採石ス、石質ハ「アタゴ」丁場産ト同シク價格ハ手石川渡シ一切ニ付二十錢ナ

第二に、「東京海事局管内航通運輸ニ関スル報告」第三回，逋信省管船局，1903-1909の検討を行った。この史料は明治後期に東京海事局管内他で管理されていた船舶について逋信省が調査したものである。この史料の整理により、登録船舶の一覧から、石材を運搬した船舶を導き出し、その船舶の寄港地を整理することができた。地図は、石材を運搬した船舶の登録地や寄港地を図にしたものである。表は、東京海事局、横浜海務局、清水海務局に登録された船舶の内、石材輸送に従事していたものを抜き出した。



番号	船種	船名	総噸数若積石数	所有者	航路	寄航地	搭載物種類	一ヶ月航海数	摘要
1	帆船	二号大栄丸	八四	高島船橋	東京伊豆間	下田清水横浜	石材薪炭	年九	二月ヨリ四月迄修繕ノ為メ休航
2	帆船	天神丸	四一	田島宇吉	東京横浜間	—	石材	三	五月航海開始
3	帆船	住吉丸	三四	兴倉半太郎	東京横浜間	—	石灰石材雜貨	五	—
4	帆船	第二号	二〇	大倉栄馬	東京浦賀間	—	炭石	不定	—
5	帆船	愛電丸	五〇	野田才一	東京網代間	—	割栗石	年二〇	—
6	帆船	修勢丸	四五	石川竹二郎	東京網代間	小室川奈	割栗石	年二四	—
7	帆船	明治丸	四七	笹本治三郎	東京宇佐美間	三崎浦賀横須賀横浜	割栗石	年二四	一、五、七、八、十二月繁
8	帆船	明神丸	五三	笹本治三郎	東京宇佐美間	三崎浦賀横須賀横浜	割栗石	年二四	一、五、七、八、十二月繁
9	帆船	鶴一丸	四八	大木保兵衛	東京網代間	三崎浦賀神奈川	割栗石	年三六	—
10	帆船	一号三社丸	四九	福業第五部	東京城東村間	不定	割栗石	年一五	—
11	帆船	一号三社丸	五五	福業第五部	東京城東村間	不定	割栗石	年一五	—
12	帆船	萬栄丸	五三	木部長八	東京宇佐美間	三崎浦賀横須賀横浜	割栗石	二	一、六、七、八、十二月尤毛繁
13	帆船	不動丸	六〇	中村権右衛門	東京下河津間	不定	石材薪炭	—	—
14	帆船	亀吉丸	四八	山田要之助	東京網代間	浦賀横浜	石材	二	—
15	帆船	長栄丸	四三	木部由太郎	東京宇佐美間	三崎浦賀	石材	二	—
16	帆船	福吉丸	四九	豊野竹治部	東京網代間	三崎浦賀横浜	石材	—	八月ヨリ航海開始
17	帆船	幸福丸	四四	台番代次	東京川奈間	浦賀益川	石材	二	七、十月八天候不良ノ為メ休航
18	帆船	改良丸	六一	梅原啓次郎	東京豆州間	—	石材	二	—
19	帆船	盛隆丸	五九	長津藤次郎外二名	東京網代間	横浜	石材	二	—
20	帆船	福栄丸	七五	佐々木徳次郎	東京下田間	不定	石材木炭	一〇	—
21	帆船	龍吉丸	六二	長澤善吉	東京網代間	浦賀横須賀	石材	年二〇	—
22	帆船	伊勢丸	七五	石川興十郎	東京下田間	—	石材薪炭	一〇	—
23	帆船	二号朝日丸	六三	渡津龍次郎外一名	東京網代間	三崎浦賀神奈川	石材	二	—
24	帆船	千年丸	五七	倉田直平	東京網代間	三崎浦賀神奈川	石材薪炭	二	—
25	帆船	石川丸	一一三	北海道庁	東京小豆島間	大阪	石木材	年九	—
26	帆船	鯨山丸	一一〇	佐伯力松	不定	—	木材石材	年九	三月航海開始
27	帆船	大黒丸	四一	石井要一	東京伊豆間	—	割栗石材	二	—
28	帆船	航神丸	八四	丸宮重助	東京伊豆間	横浜三崎浦賀	石材薪炭	—	—
29	帆船	不動丸	四〇	齋藤藤蔵	東京伊豆間	—	石材薪炭	三	九、十月休航
30	帆船	善吉丸	六五	鈴木久七	東京伊豆間	—	石材薪炭	一又八二	八、九月休航
31	帆船	宝徳丸	四五	小澤熊治郎	東京伊豆間	—	炭及石	年一五	十一月航海開始
32	帆船	浮宝丸	六七	平澤茂十郎	東京伊豆間	—	割栗石	—	七月航海開始
33	石敷船	清政丸	二二八	穴倉かな	東京横浜間	—	石材石灰	五	—
34	石敷船	萬栄丸	五五二	森田錦吉	東京豆州間	不定	薪炭石材	一四	十、十一月休航
35	石敷船	明通丸	六八五	大野眞吉	東京豆州間	不定	薪炭石材	—	七、八、九月休航
36	石敷船	長栄丸	三二二	内山興市	東京豆州間	横浜	割栗石	二	—
37	石敷船	栄福丸	三二九	石井啓二郎	東京豆州間	東京川奈	石材	二	—
38	石敷船	蓬菜丸	六二四	鈴木忠吉	東京下田間	不定	薪炭石材	—	—
39	石敷船	神光丸	五九八	丸宮重太	東京下田間	不定	薪炭石材	—	—
40	石敷船	第三金鐘丸	五四七	磯野藤三郎	東京下田間	不定	薪炭石材	—	—
41	石敷船	大徳丸	二九八	那知歌次郎	東京下田間	不定	薪炭石材	年一八	—
42	石敷船	海平丸	三四〇	玉神徳吉	東京真鶴間	—	石材	—	六月航海開始

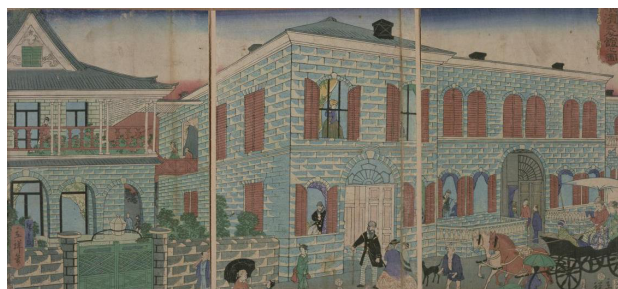
横浜海務署管内									
番号	船種	船名	総噸数若積石数	所有者	航路	寄航地	搭載物種類	一ヶ月航海数	摘要
1	帆船	長島丸	一八六	廣井長十郎	横府川村東京間	不定	石材鳥糞等	年六乃至一〇	—
2	帆船	改運丸	四四	常盤種彦	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
3	帆船	天神丸	五五	若本福太郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
4	帆船	福壽丸	六五	中條爲三郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
5	帆船	大徳丸	四七	三木徳次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
6	帆船	通洋丸	五五	田中權右衛門	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
7	帆船	第二運快丸	五〇	土屋大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
8	帆船	清海丸	四三	清海大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
9	帆船	第一号錦丸	六三	錦織丑之助	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
10	帆船	不動丸	五六	若本幸八	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
11	帆船	盛徳丸	六六	服部兵衛	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
12	帆船	観音丸	五〇	土谷大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
13	帆船	昇進丸	六三	土谷大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
14	帆船	第一号栄昌丸	六五	廣井長十郎	横府川村東京間	不定	石材	二乃至三	—
15	帆船	第二号栄昌丸	三六	廣井長十郎	横府川村東京間	不定	石材	二乃至三	—
16	帆船	貫通丸	八〇	若本幸八外六名	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
17	帆船	第五号通快丸	七八	土谷大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
18	帆船	第二北辰丸	五二	田中邦之助	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
19	帆船	栄壽丸	七七	廣井長十郎	横府川村東京間	不定	石材鳥糞等	二乃至三	—
20	帆船	第三号錦丸	六二	錦織丑之助	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
21	帆船	喜吉丸	四九	西山權次郎	小田原東京間	横浜	石材竹雜貨	一乃至二	—
22	帆船	久吉丸	五四	土谷大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
23	帆船	住江丸	七〇	常盤安太郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
24	帆船	妙法丸	五〇	田中庄七	須島村東京間	真鶴三崎浦賀	石材肥料食塩	—	四五六月第七八九月間
25	帆船	妙徳丸	五六	皆木謙吉	横府川村東京間	不定	石材	二乃至三	—
26	帆船	福寿丸	五五	青木照太郎外一名	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
27	帆船	妙徳丸	七九	皆木謙吉	横府川村東京間	不定	石材	二乃至三	—
28	帆船	一真丸	六八	御守吉次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
29	帆船	通快丸	六二	土屋大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
30	帆船	川井丸	五六	川井啓蔵	真鶴村ヨリ東京二至ル	横浜横須賀	石材	不定	—
31	帆船	東洋丸	六六	土谷大次郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
32	帆船	第一号大丸	六三	青木伸之助	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
33	帆船	朝日丸	五一	小澤寅吉	吉浜東京間	—	石材	二、五	—
34	帆船	福徳丸	四八	榎本吉太郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	三	十一月十二日第六、七、八月間
35	帆船	豊松丸	六五	田中權右衛門外一名	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十一月十二日第六、七、八月間
36	帆船	恵比壽丸	五三	二見清太郎	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十二月ヨリ航海開始
37	帆船	第一東京丸	六五	永野廣松	真鶴東京間	三崎浦賀	石材	二、八	十二月ヨリ航海開始
38	石穀船	妙徳丸	三七五	田中庄七	須島村東京間	真鶴三崎浦賀	肥料食塩石材等	—	四五六月第七八九月間
39	石穀船	千手丸	三八一	池田長次郎	宮妻村東京間	米津村三崎	肥料食塩石材等	—	十一月十二日農本製
40	石穀船	繁澤丸	四〇五	吉澤仁右衛門	真鶴横浜間	三崎浦賀横須賀	石材	三	時々東京二航スルトアリ
41	石穀船	栄吉丸	二九九	後藤源助	須島村東京間	真鶴三崎浦賀	肥料食塩石材等	—	四五六月第七八九月間
42	石穀船	蛭子丸	二六四	山口善助	須島村東京間	真鶴三崎浦賀	肥料食塩石材等	—	四五六月第七八九月間

清水海務署管内									
番号	船種	船名	総噸数若積石数	所有者	航路	寄航地	搭載物種類	一ヶ月航海数	摘要
1	帆船	明神丸	一一七	山内惣左衛門	清水阪出東京間	江ノ浦	食料石材木材雜貨	年一〇	三十一年九月開業以來検査ノ外休航ナシ又緊要ヲ感セス
2	帆船	第一号仁王丸	八三	仁王藤八	清水東京間	沼津横浜静浦	石材雜貨	—	一月中旬休航ノ為メ十月休航一三四月八月間五六七十一月間(其間因ハ新搭載物受給ノ増減ニ依ルナランカ)
3	帆船	第二号徳丸	六八	南條政太郎	清水東京間	沼津横浜静浦	石材雜貨	—	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
4	帆船	妙徳丸	一一五	木村治平	沼津東京及四國間	沿岸各港	石材雜貨	年七	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
5	帆船	第一共和丸	一一〇	真野房蔵	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
6	帆船	第二共和丸	一〇九	真野房蔵	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
7	帆船	第一号共和丸	一五七	真野房蔵	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
8	帆船	喜久丸	九〇	真野房蔵	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	一月中旬休航其他何等ノ申出ナキモ其他ハ前ト同一ナランカ
9	帆船	妙法丸	一〇〇	佐藤祐次郎	静浦東京間	清水下田横浜	石材木炭雜貨肥料石油	—	三十四年十二月開航前航海離航九十月天候ノ為メ休航スル外緊要ヲ感セス
10	帆船	明治丸	九七	佐藤祐次郎	静浦東京間	清水下田横浜	石材木炭雜貨肥料石油	年一一	三十四年八月開航以來其他ハ前ト同シ
11	帆船	一号順徳丸	七四	佐藤源平外四名	静浦東京間	清水横浜	石材木炭雜貨肥料石油	—	五月二十八日離航開航其他前ト大差ナシ
12	帆船	一号天神丸	八六	菅原吾四郎外五名	静浦東京間	清水横浜	石材米穀石油肥料雜貨	年一〇	二月三十日開航ノ、十月天候ノ為メ休航一三四月八月間五六七十一月十二月間開航物給ニ依ル
13	帆船	第二東海丸	七四	菅原忠兵衛外二名	静浦東京間	清水横浜	石材米穀石油肥料雜貨	年一〇	四月二十一日開航其他前二回シ
14	帆船	順徳丸	九七	佐藤惣五郎外二名	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	十二月十日買受ケ日迄キリテ詳細不明
15	帆船	三号順徳丸	九四	渡辺三千作外一名	清水東京間	沼津静浦横浜	石材雜貨	—	十二月十日買受ケ日迄キリテ詳細不明
16	帆船	第三東海丸	一〇二	大野由太郎	静浦東京間	清水横浜	石材米穀石油肥料雜貨	年一〇	一月十六日開航九十月天候ノ為メ休航一三四月八月間五六七十一月十二月間開航物給ニ依ル
17	帆船	このはな丸	一一〇	渡邊七郎	清水横浜東京間	駿豆相各沿岸	石材	年八	一四日開航其他前二回シ
18	帆船	第五東海丸	九五	岩崎彦左衛門	静浦東京間	清水横浜	石材米穀石油肥料雜貨	年一〇	一月十三日開航其他前二回シ
19	帆船	福神丸	五七	東海航業合資会社	静浦東京間	清水横浜	石材米穀石油肥料雜貨	年一〇	一月十二日開航其他前二回シ
20	帆船	第三号南海丸	一〇二	池田藤七	紀尾三、陸中東京間	沿岸各港	木材木炭セメント石材	年七	休航ナシ一月ヨリ五月間第六月ヨリ十二月間散
21	帆船	袖ヶ浦丸	一五二	津島貞三	紀尾三州東京間	登相沿岸	木材石炭セメント石材	年六	休航ナシ一月ヨリ五月間第六月ヨリ十二月間散
22	帆船	第二号順徳丸	九二	山本京助	清水東京間	松崎	薪炭石材	年八	九十月天候ノ為メ休航一三十一月間緊要他ハ前
23	帆船	順徳丸	一一二	山本伊助	松崎東京間	—	薪炭石材	年九	九十月天候ノ為メ休航一三十一月間緊要他ハ前
24	帆船	清喜丸	六九	大野萬吉	三浜東京間	—	石材薪炭	—	七八九月天候ノ為メ休航他ハ前
25	帆船	家久丸	一一〇	藤田五右衛門	竹篠東京間	—	石材薪炭	年一三	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
26	帆船	明通丸	一〇七	鈴木彌四郎	竹篠東京間	—	石材薪炭	年一三	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
27	帆船	家徳丸	一〇七	肥田市平	清水東京間	竹篠	石材薪炭	—	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
28	帆船	明勢丸	九五	土屋伊三郎	竹篠東京	—	石材薪炭	年一三	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
29	帆船	敬幸丸	一〇四	杉本平七	竹篠東京	—	石材薪炭	年一三	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
30	帆船	源丸	七五	鈴木佐兵衛	竹篠東京	—	石材薪炭	年一三	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
31	帆船	第二号運丸	一一〇	堤安吉	竹篠東京間	—	石材薪炭	—	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
32	帆船	妙法丸	九二	石塚豊太郎	三浜東京間	登相沿岸	木炭石材	年一〇	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
33	帆船	永井丸	三六	森木口松太郎	土肥横浜間	登相沿岸	木炭石材	年一〇	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
34	帆船	明勢丸	五〇	森田兵衛	田子東京間	—	木炭石材	年七	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
35	石穀船	甲子丸	八四八	岡田善平	清水東京間	静浦	木炭石材雜貨	年一〇	六月中旬休航其他前二回シ
36	石穀船	喜吉丸	三六五	渡邊常次郎	竹篠東京	—	石材薪炭	年八	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前
37	石穀船	清喜丸	七三〇	大野勘三郎	竹篠東京	—	石材薪炭	年一四	九十月天候ノ為メ休航一三十二月間緊要他ハ前

第三に、下田市旧市街に集中している「伊豆石」を使用した街並みについて、浮世絵に描かれた横浜や東京の街並みから類似点の見出せるものをいくつか確認した。



下田市ベリーロード（カフェ「草画房」他）



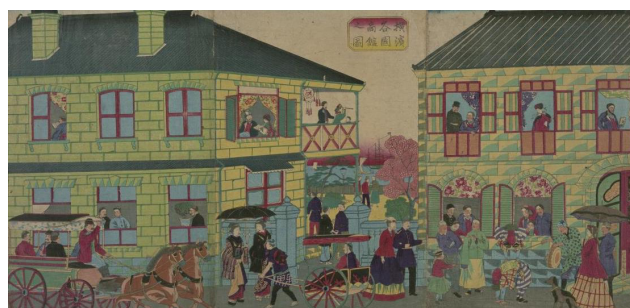
「横浜異人館之図」歌川広重（2世）1865年東京都立中央図書館蔵



「東京銀座要路煉瓦造真図」歌川国輝二代画 1873年東京都立中央図書館蔵



「横浜本町海岸伯爵邸の全図」歌川広重（2世）1869年



「横浜各国商館之図」歌川広重（3世）1871年東京都立中央図書館蔵

【史料整理のまとめ】

第一の史料整理と文字起こしにより、下田大沢地区と大賀茂地区に大規模な石切場群が存在したことが判明した。今回ドローンによるデータを取得した採石場遺跡群もこの下田大沢・大賀茂石切場群の採石場遺跡のうちの一つであると考えられる。記載された詳細を見ると、首都圏の近代化が課題となっていた明治期を通して、首都圏向けの建材供給地として年間数万切を越す産地となっていたことが分かる。

第二の史料整理によって、伊豆半島およびその周辺の石材輸送に従事していた船舶と経路が判明した。下田は、石材産地であるとともに多くの船舶の中継地となっていた。下田を中継した船舶の活動範囲は、西方は少なくとも遠州の掛塚湊、さらに駿州と豆州の各港町と関わりながら、東方は横浜や東京までその範囲が及んでいたようだ。この広大な範囲に、下田大沢・大賀茂石切場群を含む下田産の石材が流通していたと考えるのが自然だ。

第三の史料整理により、下田市の市街地に残る石材を用いた建物と、明治期の横浜・東京

の建物に類似の特徴がある可能性が指摘できる。第二の史料整理により、すでに下田の建築物に使用された石材と京浜に出回った石材の材質的な一致は容易に指摘できる。浮世絵に描かれた京浜の近代建築物は、「緑色で表現されたブロック状の物体」を積んでいるものが多数見受けられる。他方で、下田市内で散見される「伊豆石」が使用された建物も緑色の軟石を加工して積み上げたり、貼り石としたりする工法で造られている。よって両者には景観的にも類似性があったのではないかと推察される。

〔④伊豆石産業遺産群の存在周知・広報〕

上記の調査結果を踏まえて、下田市内での伊豆半島の産業史にまつわる遺産を群として取りまとめ、「伊豆石産業遺産群」を定義した。これを、2023年11月3日（金）～19日（日）に開催された「南豆製氷を未来へ！一建造100周年企画展」にて、展示物とチラシを提供することで、一般に向けた広報活動を行うことができた。本展示は、石造の近代製氷工場「南豆製氷」の保存運動に携わった市民グループ「南豆製氷応援団」、および「下田まち遺産制度」に基づき下田まち遺産に関わる活動を行っている「下田まち遺産の会」との協力関係によって実現した。

「南豆製氷を未来へ！一建造100周年企画展」

日時：2023年11月3日（金）～19日（日）10:00～16:00（水曜休館）

場所：下田市 旧澤村邸 蔵ギャラリー&展示室（ペリーロード／下田市三丁目16-10）

主催：南豆製氷応援団 入場無料／カンパ歓迎

南豆製氷応援団 発起人

下田まち遺産の会 設立準備会

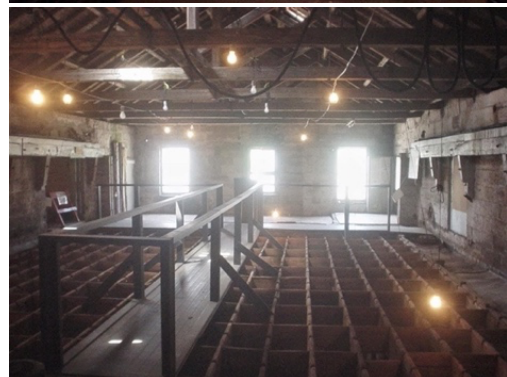
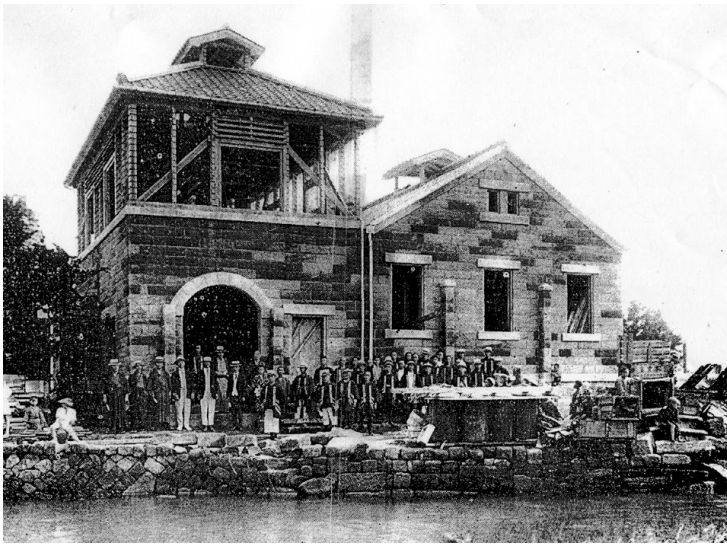
はなぶさ みどり

「伊豆半島最大級の石造建築で、長きにわたって港町下田の漁業を支え続けた旧南豆製氷所は、大勢の人々を巻き込んだ保存運動の甲斐なく、2014年に解体されました。南豆製氷が建てられたのは大正12年、2023年は建造100周年に当たります。この建物を守ることができた世界線があるならば、そこでは年間を通じて様々な記念イベントが開催されることでしょう。その世界線で生きられないことが残念です。保存運動が契機となって形成されたコミュニティや人と人とのつながり、それぞれに夢見た下田の未来など、南豆製氷と共に失われたものは二度と戻ってきません。ただ、保存運動は「正のレガシー」にもつながりました。南豆製氷を基点に生まれた「下田まち遺産」には今や154件が登録され、下田市には景観まちづくり条例ができました。保存運動を振り返り、その成果を未来へつなげるための企画展を開催します。南豆製氷を中心にすえた企画展はこれが最後です。この機会にぜひ下田へお運びください」（はなぶさ みどり著）

【南豆製氷所の保存活動と企画展示について】

南豆製氷所は、1923（大正 12）年に伊豆半島初の近代製氷工場として建造された伊豆半島最大規模の伊豆石建築だった。2005 年の廃業を受けて建物を活用しつつ後世に残すため活発な保存運動が行われ、一時は国の登録有形文化財にも指定されていた。しかし、当初建物の購入を検討していた下田市には財政的余裕がなく、具体的な活用策が描けないまま、2014 年（平成 26 年）に老朽化を理由に所有者の意向で建物は解体された。この保存活動は、地域の歴史文化を考える機会を提供し、後に制度化される「下田まち遺産」のコンセプトを生み出した。

※画像は、展示会及び、かつての南豆製氷所の画像。



〔参考資料〕 ※これまでの下田市での「伊豆石産業史」の認識に関わる資料

1) 『下田市旧下田町伝統的建造物群保存対策調査報告書』(2013年)

※下田市内の建築物を対象とした調査の結果、伊豆石の産地や用途がまとめられた。

2) 『下田市景観計画』(景観計画改正日 平成27年6月30日) 8頁

未来に活かしたいまち遺産

- ・下田を象徴する下田太鼓祭り・黒船祭
- ・伝統的な伊豆石造り、なまこ壁の建造物
- ・町立てによる町割り・旧町名
- ・開国の舞台となった了仙寺・長楽寺
- ・下田八幡神社をはじめとする神社・仏閣

3) 『下田市歴史的風致維持向上計画』(計画期間平成30年度から平成39年度) 169頁

(1) 文化財の保存・活用の現状と今後の具体的な計画

未登録・未指定の文化財について、特に下田のまちなみを特徴づける「なまこ壁」や「伊豆石」を使用した商家・民家・石蔵等の有形文化財は、経年劣化が進行しており、また、所有者の高齢化や継承者不足から存続が困難となっている。これらの建造物については、国登録有形文化財の登録や歴史的風致形成建造物への指定、下田市景観まちづくり条例に基づく「登録まち遺産」として幅広い視野で保護、保存、活用を推進していく。併せて、地域に根付く伝統行事である祭典等の無形民俗文化財等は、特に担い手育成を重視し、活動団体への支援を継続する。

(2) 文化財の修理・整備に関する具体的な計画

修理事業を実施する際には、文化財の価値を損ねないよう過去の改変履歴や調査記録等の活用と、新たな調査研究に基づき、文化財保護法、静岡県文化財保護条例、下田市文化財保護条例の現状変更等の許可制度に適合させ、修理を行う。未指定の有形文化財である建造物及び記念物は、所有者や管理者と協議を行い、登録有形文化財制度や、歴史的風致形成建造物としての指定、下田市景観まちづくり条例等を活用しながら、修理や整備を進める。

4) 『第2次下田市観光まちづくり推進計画』(令和3年3月静岡県下田市) 16頁

歴史的建造物の景観を楽しむことができるよう、下田市景観計画に基づいた建造物の保全やまち遺産を紹介する冊子により情報集約を行うとともに、旧澤村邸では情報発信拠点としての機能の強化が図られた。一方で、アンケート結果によると文化財の認知度が低い傾向にあるため、認知度向上のための情報発信や、文化財を活用した観光コンテンツの開発が必要である。

pp.2 から pp.12 までの調査結果等を踏まえ、下田市における「伊豆石産業遺産群」の一般向け説明文及び遺産群一覧の例を作成した。次の pp.14 から pp.15 にそれを示す。

〔参加者/役割分担〕

剣持佳季：調査計画立案/プロジェクト管理/史料調査/報告書執筆

塩見寛：調査統括/報告書執筆補助

露木良治：会計担当

英みどり：ドローンによる撮影サポート

野崎晃：ドローンによる撮影サポート

宮崎大：ドローンによる撮影サポート

鈴木正之：ドローンによる撮影サポート

七尾洋介：システム/渉外

樋口拓也：史料文字起こし

鈴木麻佑：史料文字起こし

坂本琢哉：報告書査読

株式会社補修技術設計：ドローンによるデータ撮影及び3Dモデル作成

～下田の「伊豆石産業遺産群」とは？～

かつて下田は、江戸大阪間の風待ち港として栄えた港町でした。この港を経由して多くの物資が、江戸へ向かいました。一方で、火山活動によってできた伊豆の先端部にあるという特徴から、石材が豊富に採られました。東海道中膝栗毛を執筆した十返舎一九は、伊豆紀行の中で下田を訪れた時にこのように述べています（1800年代初頭）。「この辺りの山より伊豆石を切り出すゆゑ、洞の如き岩窟多し、下田よりあいの山峠にかかり…」

幕末になると海外から江戸を防備するために石材需要が加速。ペリー提督は、開港後の下田で伊豆石の記念碑を受け取り、ワシントンに持ち帰りました。現在石碑はワシントン記念塔内にはめ込まれ、観光客も見ることができます。

明治元（1868）年に明治政府に雇われたイギリス人技師リチャード・ブロントンが下田を視察しました。近代化事業に使う良質な石材の調達に苦心していた彼は下田に目をつけ、イギリス人の石工たちを送り込みました。以後この地で採られる良質な石材は、明治期を通して半世紀ほども横浜の近代都市化や東京の近代都市化に多大な貢献を果たしました。少なくとも明治中期まで、伊豆半島全土からの石材は、京浜に出回った石材のおよそ7から8割を占めていました。

例えば、下田沖の神子元島灯台（石造）、横浜外国人居留地の日本初の近代道路工事や街並み、日本初の鉄道駅舎新橋駅・横浜駅などには下田産の石材が使われました。また日本初の近代都市計画の東京銀座煉瓦街の建物の外壁などにも下田の石材が使われたと考えられます。

石材の輸送には地元の有力者が帆船を所有して貢献しました。例えば、下田市旧町内の邸宅が下田まち遺産に登録されている「雑忠」鈴木家は、石材輸送を担った蓬萊丸を所有して廻船問屋を営み、日本の近代都市化の一端を担いました。

現在下田市内に残る伊豆石の建物は、当時の下田の重要性と、外国人たちとの交流によって生じた日本の近代都市の源流が、下田にあったことを証明しており、日本の近代に迫るための歴史的資産です。

下田産の一部の石材の特徴である、波打つようなまだら模様を見て、ある市民は呟きました。「波の用に見える模様には、海と共に生きてきた下田の人々の心象風景が反映されているみたいだ」この感覚が後世にも残ってほしいと思っています。

【下田市内の伊豆石産業にまつわる遺産の例】2023.10.20 現在

遺産	解説
神子元島灯台 ★	明治政府に雇われたイギリス人技師リチャード・ブラントンの指揮の元明治3年に点灯した現役の灯台。灯台建設には下田蛭子崎からの石材が使用された。
玉泉寺とアメリカ・ロシア将兵の墓 ★	初代米国総領事館。伊豆石で作られた外国人乗組員の立派な墓が並ぶなど、下田と異国の文化交流の中で伊豆石が利用されてきたことを感じさせる。
恵比寿島遺跡	古墳から奈良期の土器が出土した遺跡で、古代の儀式の跡と見られる焼き火跡も確認されている。島の上からは千畳敷に多くの採石跡が確認され、独特の景勝地となっている。
白浜神社 ★	白浜神社内には灯籠等様々な伊豆石作品が残されている。玉垣は、神子元島灯台建設で英国人と技術交流した小川清助の作。白浜神社の海岸には採石痕が残る。
ペリーロードの石造建築物の街並みと了仙寺 ★	ペリーロードの街並みは浮世絵に描かれた横浜外国人居留地の景観との類似点が多い。明治の街並みが残る貴重な場所である。ペリー提督一行はこの辺りを行進して下田条約調印のための了仙寺に至ったとされる。
庚申堂と三十三観音 ★	石室の中に三十三番観音石像と閻魔様が祀られています。昔、閻魔様の運搬には力比べが行われ、現在の民宿の「小はじ」の祖先が、一人でここに世追い上げた地域の人々は伝えています。
雑忠 ★	下田まち遺産「雑忠」の建物は、廻船問屋として栄えた鈴木家の邸宅。「雑忠」は、屋号の「雑賀屋」と鈴木家の襲名である「忠吉」の頭文字をとったもの。鈴木家は、廻船業で石材を首都圏に運搬する役割を担っていた。明治期に登録された石材輸送船の一覧の中にも、鈴木忠吉名義の帆船「蓬萊丸」の名前が確認できる。
敷根丁場	下田市敷根のエリアには、古くから石切場が点在していたとされる。史料上、産出される石材の種類には「斑石」とあり、これは旧新橋駅の発掘調査で確認された石材と同名を冠している。
土藤商店と大工町プレイス ★	土藤商店のレトロな看板ギャラリーは地元でも有名なスポット。隣接する大工町プレイスのポケットパークは土藤商店の外壁の「アケゴコロ」を景観に取り込んだ作りになっており、2023年の静岡県景観賞で優秀賞を受賞した。
邪宗門	建物両面を伊豆石で造る建物で、喫茶店が営業している。内部の湾曲した梁が特徴的で、調査では下田の船大工の手が入っているのではないかと推察されている。
CAFÉ くしだ蔵 ★	伊豆石を用いた蔵を利活用したカフェとして営業している。また、建物の2階は江戸文化の海鼠壁で、和洋の融合が見られる。店内ではブルースやジャズが流れ、軽食を味わうことができる。
旧澤村邸 ★	旧下田ドック創業者の澤村久右衛門氏によって大正4年に建てられた。石蔵のギャラリーでは様々な展示が行われる。来遊客用の休憩所・案内所として運営され、「下田まち遺産」の一つでもある。
下田ホテルジャパン地下石切場	下田ホテルジャパンの地下には、伊豆石を切り出した石切場の跡が残されている。会員制で公開されており、ライトアップで幻想的な空間を体感することができる。
大沢丁場	明治期、大沢や大賀茂の地域には、多数の採石場が点在していた。記録によればおよそ明治中期ごろをピークに石材が年間数千本単位の石材が首都圏向けに採石された。

★は「下田まち遺産」に登録されているもの。

「建造物に位置情報」は、個人識別が可能な「個人情報」には該当しませんが、本研究の地図情報の公開や提供(本報告書を含む)は、学術的目的等の適切な利用目的に則して開示を行なっています。

本研究で対象とした建築物は、美術の著作物に当たらない建築物ではありますが、記録用の写真撮影は公道から撮影に留め、また内部撮影等は持ち主の許可を取るなど、著作権に最大限配慮しております。

公益信託大成建設自然・歴史環境基金
2022年度 助成活動・研究報告書

「伊豆石の文化圏」調査研究
—伊豆半島・下田大沢地区の採石場遺跡群の
文化財的価値評価及び採石場の3Dモデル化—

- 発行日 2024年1月28日
- 発行者 一般社団法人 伊豆石文化探究会
- 一般社団法人 伊豆石文化探究会
公式サイト <https://www.izustone.or.jp/>
メールアドレス contact@izustone.or.jp
事務局 〒410-0004 静岡県沼津市本田町 5-17
phone 055-926-8241 fax 055-922-9911

[協賛企業]

The Port For Your Dental & Oral Health

伊豆石の蔵への想い



Dental Office Minato



Dentistry Pediatric Dentistry Dental & Oral Surgery

デンタルオフィスみなと
沼津市本田町5-17

Phone 055-926-8241 <https://dentoffice-minato.com/>

当院を建築する前には伊豆石の石蔵がありました。地盤沈下で傾いてしまった石蔵ですが、曾祖父母が苦労して建てたと聞いていたので、保存・補修・移築のために八方手をつくしましたが、その願いはかなわず、残念ながら取り壊しました。あれから15年たちますが、今でもこの蔵は私の心の中にあります。このことがきっかけで、私は伊豆石文化探究会の立ち上げに参加し、伊豆石文化探究会の事務局長を務めております。
院長 露木良治

E4

research-produce-design-build for ARCHITECTURE

